



てら子屋  
interview

# 盛口満さん 好奇心心の育て方

● Mitsuru Moriguchi

1962年、千葉県生まれ。千葉大学理学部生物学科を卒業後、自由の森学園中・高等学校の理科教師として生物を教える。2000年同校を退職。現在は沖縄に住み、珊瑚舎スコーレの活動に携わっている。主な著書に「僕らが死体を拾うわけ」（どうぶつ社）、「タヌキまるごと図鑑」（大日本図書）、「ネコジャラシのポップコーン」（木魂社）、「はくらの昆虫記」（講談社）などがある。



聞き手 中間真一（HRI主任研究員）

学校で子どもたちに生物を教えるかたわら、自然観察に関する数々の本を著わしている盛口満さん。その好奇心あふれる文章と確かな観察力にもとづいた精緻なイラストは、多くの読者を魅了しています。中でも、全ページ鮮やかなイラストで埋め尽くされた「ほくのコレクション～自然のなかの宝さがし」は、わくわくするような楽しさがいっぱい詰まった絵本です。そのベースとなったのは、なんでも拾ってとっておくという子どもの頃からの癖だったと、盛口さんは語ります。

発見が尽きないから、  
生き物はおもしろい

—— 盛口さんの著作を読んで思ったのは、とにかく観察する眼がすごい。好奇心がものすごく強い人だと確信していました。尽きることはない好奇心というのは、子どもの頃はだれもが持っていたように思うのですが、たいていは大人になる間にどんどん削ぎ落とされてしまう。それが削がれずに大人になったというのは、いったいどんな育ち方をしてきたんだろうという興味があ

ります。盛口さんは、房総の館山で生まれ育っていますよね。

盛口 ぼくが最初に夢中になったのは貝拾いなんです。とにかくなんでも拾って、とっておくのが好きな子どもでした。変だなと思ったのは、小学校3、4年生の頃。そのぐらいになると、「お前、いつまで虫を捕ってるの？」って言うやつが出てきちゃうでしょ。でもそのとき、ぼくはほかのことが何もできなかった。音痴で不器用でスポーツもできないし、お小遣いもほとんどもらえなかったから、そういう遊びにも走れない。結局、やだなどというか、フツウの人になりたいという思いはあったのですが、ほかに「大人げ」といわれるものに進む余地がなかったんです（笑）。

—— 貝拾いはいつ頃から始めたのですか。

盛口 小学校2年生のときにオヤジに海に連れて行かれて、ぼくが勝手に拾い始めたのがきっかけです。はまったのは、行くたびにいろいろな種類の貝に出会えるのが不思議だったから。生き物が好きになるのは、その多様性に気がつくかどうかというのが大きいですよ。それで、最初は貝でしたが、倒木に虫がたかっているのを見て、「あ、虫も同じじゃん」と、今度は集める対象が虫になった。たまた



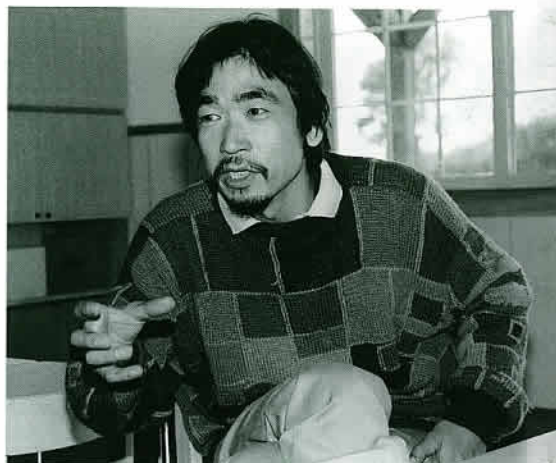
ま近くに川がなかったたので、魚に興味が行かなかっただけの話です。

—— 生物への興味は、中学生や高校生になっても変わらなかったのですか。

盛口 とりあえず続けてはいましたが、ブランクはありました。というのは、自然観察会などに行っても、集まるのは幼稚園から小学校3、4年生ぐらいまで。そこから上はダーツと抜けて、あとは子どもたちの親の世代が来る。なんかその場にいるのがカッコ悪いという気持ちがありました。それに、その頃になると人間に興味を持ちましたから。

—— 人間が好きになつていたんですか。

盛口 好きになつてはいたけどね。特に異性が。報われはしませんでしたけど(笑)。それでも生物に対する興味はずっと持ち続けていて、高校では生物部に入つたし、大学も生物をやりたいくて生物学科を選んだ。実はうちのオヤジは化学の教師なんですけど、そのオヤジがこう言つたのを覚えていた。「どんなに科学が進んで、いろいろなことが明らかになつても、生物はこんなにいっぱい種類がある。1種1種見ていつたらキリがないぞ」って。それはすごい安心感でした。ああ、これで一生遊んでいられるのかと(笑)。



## “妄想”と“引つかり”を大事にする

—— 盛口さんの場合、好奇心というのは大人になるにしがたで、しほむではなく、どんどん膨らんでいます。しかも、出発点は遊び。遊んで、拾って、食べたりしながら、すこよく見ていて、考えて表現しているという印象を受けます。盛口さんの生き物に対する向き合い方を教えてください。

盛口 それは、2種類あるかもしれない。一つは、妄想を膨らませる“こと”。子どもの頃つてみんなそうだと思つたのですが、たとえば、貝を拾いに行つて、きれいな貝を見つけたら、次はもっとスゴイ貝が落ちているんじゃないかと思つて、また行きたくなる。そうやって、どんどんはまつていくわけです。それは

一種のイメージトレーニングだし、妄想です。もう一つは、“引つかり”を大事にする“こと”。好奇心の見つけ方は生徒に教わつたのかなとも思いますが、生徒と話をしていると、なにかに引つかる瞬間があるんです。つまり、なにか変なことを言うわけ。それでフツと気がつく。

例をあげると、ぼくは最近、化石に夢中になつていますが、どうしてかという、生徒が化石をおもしろがつたかなんです。化石を前ふりに生き物の話をしようと思つたら、生徒からいろいろとおもしろい話が出てきて、前ふりだけで授業が終わつちやつた(笑)。一つの“引つかり”がいろんなことにつながり、発展していきます。だから、そうした瞬間をととても大切にしています。

—— その“引つかり”に気がつくかどうか、大事なポイントじゃないかと思つてます。

盛口 ぼくも教員になりたての頃は、なかなか気がつきませんでした。生徒が何をとおもしろがってくれるのか、まったく予想がつかないんです。でも、その意外性がいちばんおもしろかつたりする。

あるとき、読んだ本に「子どもは自然だ」つて書いてあつて、すこく同感したのです。「なんだ、こいつらも生き物じゃん」つて(笑)。身近な観察対象として見ると、めちゃくちゃおもしろい。それで、

生徒のことをメモリ始めました。いま進行中の新しい本は、子どもたちの視点から見た虫の本なのですが、そのベースとなつているのは16年間書き留めたばかりのノートです。

—— 16年間！ それはすこく価値のある情報ソースですね。

盛口 ノートには生徒が見つけてきた虫のことなどが書いてあるのですが、出てくる虫にかなりムラがある。だけど、それこそが生徒の視点なんです。たとえば、人間つていやなもの、真つ先に目に入つたりするでしょ？ 蝶よりも蛾をいっぱい見つけちゃうとか。そうしたゆがんだ世界が、生徒たちにとつては、ある種のリアルさなのだと思います。

それに、同じものを見て十人十色。ある意味で、際限のないニユースソースです。時代によつて、どう変わつてきたかという面白さもありますし……。

## 子どもの好奇心を

### 削いでいるのは大人の論理

—— 盛口さんのノートから、時代によつて子どもたちが変わつてきていることが感じられますか。

盛口 けつこうしぶとく変わらないですね。ノートを見ていると、子どもは絶えず生まれてきて、やつぱり自然とか虫が



好きなんだなっていう安心感がある。現代っ子といわれる子どもでも、自然の中で遊ぶのが嫌いなんじゃないやなくて、遊ぶ機会がないだけ。せいたくは言えなくても、自然に触れられる環境があったほうが、子どもにとつては幸せだろうと思う。

本を書いていて思い出したのですが、ぼくが子どもの頃に遊んでいたエリアというのは、自宅から半径せいせい500メートル程度に限られていたのです。それでも飽きなかったですよ。逆にいうと、近くに公園があつても、子どもの行動範囲から外れていたら、遊び場としての意味がないということですよ。

——自分の居場所があるからこそ、これだけたくさんものを見ることができるともいえませんよね。

盛口 そうですね。実際に見始めたら、どんどん出てきますしね。けっこう細かく見ていたつもりでも、なんだこりやというのが平気で出てくる。

——盛口さん自身はそういうふうにとことん見ることができると、おもしろがることのできると思うのですが、先生という立場に立つたときに、それをどうやって子どもたちに伝えているのですか。学校では、じっくり立ち止まって見る余裕がないでしょう？ どうしたか、じっくりものを見られるような学校、学びの場があり得ると思いますか。

盛口 うちの校長がよく言うんです。

「今の学校は、今の社会をまわすための人間のことしか考えていないけど、それは根本的な間違いだ。未来をまわすのは子どもたちで、自分たちの未来も子どもたちにかかっている。だから、その子どもたちが大人になったときにどういふ社会をつくるのか、ちゃんとイメージできるような教育をしなくてはならない」と。

忙しいとか、立ち止まる時間がないとかいうのは、むしろ大人の論理から入っているからです。多分、大人自身もつといるいろいろなことを面白がる余裕を持つことが、まず必要なのだと思います。

## 簡単にわかってしまったら、つまらない

——先ほど、子どもの行動範囲の話が出ましたが、それに関連した情報獲得の手段と範囲として、10歳まではインターネットを使わないほうがいいのではないかと、いろいろな人に言っているのですが、猛反発を食らうことも多い（笑）。学校ではインターネットを使った調べ学習なども始まっていますが、その点についてはどう思いますか。盛口さんはEメールも使ってないようですよ？

盛口 インターネットに興味がないんですよ（笑）。一つ思うのは、みんなができることは、自分はやらなくてもいいんだということ。みんながやるようになったら、できる友だちが近くにいたりするから、そいつに頼めばいい。できないことがあると、けっこう人となることができませんよ（笑）。

みんなができないことを、一つだけできるといふのがいいんじゃないかと思っ  
ています。それに、ぼくが欲しい情報は  
インターネットにはない。だから使いよ  
うがないなど……

——たとえば、授業で使うことを考えたとき、子どもにとつてはどうでしょう？

盛口 人によつてはいろいろな使い道があつて、いいのではないかとは思いますが、どういふ動機で、どんなものに使うかというだけの話ですよ。たとえば、「うちのどんぐりを差し上げますから、あなたのどんぐりを送ってくれ」と、インターネットを介して実際に物々交換するんだつたら、おもしろいと思う。

この間、ゴキブリに関する授業を友だちとつくっていたのですが、思い浮かべるゴキブリというのは人によつてみんな違う。ゴキブリは日本全国にいるといわれているけれど、本当にいるのはどんなゴキブリなんだろう？ あちこちにメールを出して、「あなたの家にいるゴキブリは何か」と聞いてはどうかという話になつた。だけど、普通の人に聞いたのでは、「ただのゴキブリ」という答えが返ってくる恐れがある。虫に詳しい人じゃないとだめだということになり、挫折しました。

——確かに、酸性雨の実態を調べるのに、インターネットで子どもたちに呼びかけたら、いろいろな地点の雨水の酸性度があつという間にわかり、ものすごい量のデータベースになったという話があります。あれはすごいなと思いましたが、

——ただ、ある言葉を検索エンジンに打ちこんで、出てくるサイトを頭から5つくらいパッパッ





て見て終わるといのが、今の一般的な使い方です。それで、わかったような気になってしまふ。幼稚園とか小学校低学年ぐらいの子がそれをやってしまったら、自分の心と体と時間を使って、感じたり、考えたり、学んだりするおもしろさが薄れてしまふ。

盛口 この間、卒業生が遊びに来て、「今の時代、豊かになったおかげで子どもたちの選択肢が増えているという話があるけれど、それはウソ。自分の実感だと、選択肢があつたとしても、ルートが決められていて、その先が全部見えちゃつていふ。だから、逆に身動きが取れないんだ」と言うんです。

なぜ、そんな話をするかというところ、ぼくは貝の本を書いています。だけど、ぼくが子どもの頃は、貝の本なんてそんなに多くはなかった。すると、想像する余地が生まれてくるし、図鑑に載っていない貝も拾える。「これってもしかして新種？」とかいつて、盛り上がるわけです。

## 夢中になつている大人を子どもに見せよう

—— 確かに、すごいものを見つけたんじゃないかと思つても、すぐに正体がわかつちゃうと、さつきおつしちゃつていた。妄想も膨らみませんね。

盛口 いずれは、そこにたどり着くわけ

だけど、たどり着くまでに時間がかかればかかるほど楽しめるでしょう？ それに、人間は不完全なものを見ると想像力を働かせることができるけど、最初から完全な情報が与えられてしまうと、想像の入る余地がなくなつてしまふ。

今でもよく覚えているのですが、図鑑にアマゾン川の巨魚とかいつて、大人4人が抱えている大きな魚の絵が載つていた。すぐに「こんなのいるわけない、絵だから描けるんだ」と思つたけど、実は本当にいたのです。絵だとウソじゃないかと疑う余地があるけれど、完全に近い情報が瞬時に手に入るようになると、疑つたり想像したりする余裕がどんどんなくなつてしまふ。

—— いまお話を聞きながら思い出しましたが、私も小学校4年生のときに夏休みの宿題で貝殻の標本を作つたんですよ。でかい箱に宝物のように貝殻を並べて、一生懸命図鑑で調べたのですが、名前がわからない貝が3分の1ぐらいあつた。もちろん、すごく残念だったけど、一方でわからないうれしさも交じつていたことを思い出します。

盛口 結局、そのときの記憶や思い出というのは、今まで残つているわけでしょう？

—— そうそう。あのときは、貝つてめちゃくちゃいろいろな種類があつて、こんなの名前をつける人はすごいと思ひました。

盛口 本を読んでいても、余韻の残る本

というのはどこかにそういう部分があります。全部でいねいに書かれていると、そのときはおもしろいけれど余韻が残らない。

授業も同じで、最初から最後まで懇切ていねいにやると、その時間はワーツと盛り上がるけど、すぐに忘れちゃう。どこかで引つかつたり、ぐちゃぐちゃになつたりして、「何でだよ、わかんねえよ」というほうが印象に残ります。

—— 盛口さんは、子どもの頃の好奇心が削がれたり曲げられたりすることなく、そのまんま大人になつたという感じがするんですが、そういうふうには、いったいどうすればいいのでしょうか？（笑）

盛口 うーん、ぼくが本当にそうなのかどうかは置いて：（笑）。多分、そうした好奇心いっぱい大人の姿を、子どもに見せることなんだと思う。ぼくだったら、本当に生き物が好きだという姿を、子どもたちの前にさらけ出す。現にぼくがそうでしたから。

うちは母親が好きなことはかりして、子どもの面倒など見なかつたから、大人はみんなそういうものだ、子ども頃からずつと思つていました。

—— そういう大人が、もつともつと子どもの前に出てこなくてはならないということですね。

盛口 そういう人がいる場所を学校とし

て囲つてもいいわけです。今は学校にいる人が先生ですが、そういう人がいる場所を学校にする。うちの学校（珊瑚舎スコレ）なんか、まさにそうです。最初は学校と呼ぶのさえ抵抗があつた。なしる認可もなければ、校舎だつてピルのワンフロアを借りたもの。講師は、校長が飲み屋でスカウトしてきた人間ばかりですから（笑）。

でも、スタイルというのは関係ない。先日、自然観察会でリュックサックからいろんなものを出していたら、「行商博物館だね」と参加者に喜ばれたけれど、そういう意味では歩く学校があつたつていいし、校舎のない学校があつてもいい。もつと柔軟にとらえる時期が来ているのではないかと思います。



『ほくのコレクション～自然のなかの宝さがし』（福音館書店）  
身近に見られる昆虫や植物などを、その生息する自然とともに描いた図鑑風のユニークな絵本。文章だけでなく、絵もすべて盛口さんが描いている。